

倉石祥子……国立O大学呼吸器内科医師。助教。
岩谷乱風……刑事・医師。祥子の彼氏。



高垣昭五朗……国立O大学乳腺外科教授
佐治川富重……国立O大学呼吸器内科教授
岩永剛文……国立O大学医学部長
川上実男……国立O大学病院病理学教授
寺内満寿夫……国立O大学病院病理学元准教授
津島研一……国立O大学乳腺外科医師。助教
三塚瑠璃……国立O大学呼吸器内科看護師
宮嶋小夜子……乳癌患者
小玉妙子……乳癌患者



- 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
- 手紙
女医
依頼
乳腺外科病棟
病理検査室
癌死
死者
死への疑惑
心騒ぐ師長
医学部長への封書
病理診断
死者への手紙
もう一人の患者
病理医誤診断
- 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15
- 外来騒動
肺癌細胞
ひろがる疑惑
瑠璃の追跡
追加症例
指紋
誤診断医一覽
外来闖入者
教授の怒り
大胆な推理
教授の安堵
誤診断検証
真犯人

「あなたの右乳房は癌ではありません。」

宮嶋小夜子は手が大きく震えるのを感じた。差出人の名も住所もない封筒だった。手書きの宛名が、やたら鋭い線を浮かび上がらせている。

封筒を置いた手は知らず知らずのうちに右胸をまさぐっていた。衣服のよれしか感じない胸がいかに寒々しい。小夜子の目は再び同じ文章の上を走った。

「あなたの右乳房は癌ではありません。誤って切り取られました。別の癌患者さんの切除組織と間違えて診断されたのです。その患者さんはまさしく乳癌だったのですが、良性と診断され放置。その後、死亡されています。」

小夜子は何度か息を整え、手紙を両手で支え、強く目をみはり、騒ぐ心をなだめなければならなかった。

「あなたの右乳房腫瘍の正



式の病理診断名は、『線維腺腫（せいゐせんしゅ）』です。良性腫瘍です。乳癌根治術を受ける必要など、まったくありませんでした。」

「癌じゃない……小夜子は封筒に手を伸ばして、もう一度裏を見たけれども、ない文字が現れるはずもない。放り出してしまった。」

震える指で握りしめられた手紙がくしゃくしゃになった。

「どうかご安心ください」

「ご安心くださいって言われたって……。小夜子の顔に血がのぼり、ますます赤くなった。」

「誰がこんな手紙を、誰がこんなことを信じろというの」

手紙を何度も読み返した小夜子は、右乳房が癌ではなく線維腺腫という



のも理解できなかったし、そもそもこの手紙自体、ずいぶん馬鹿げた話に思えた。

宮嶋小夜子は二〇〇八年三月二十八日、左乳癌の診断で根治術を受けている。



左乳癌です
大学病院を
紹介しましょう

だが、小夜子はほとんどの時間、眠りつづけた。

翌日、教授回診があった。小夜子は大きな



術を受けている。

執刀は国立O大学

乳腺外科教授、高垣

昭五郎である。

手術室から病棟に

戻り、回復室にその

日一日収容された。

胸全体が何とも言

えない、重い板が置

いてある感覚だった。

何度か、主治医と

看護師が診回つてき

目を見開いて、術者でもあり、大学医学部教授という最高権威者の顔をまじまじと見つめた。教授の顔をこれほど近くで見たのは初めてだった。

小夜子の視線が、ほどかれた包帯の下に移った。小夜子は息を呑んだ。あるはずの右乳房がなかった。

小夜子は声をあげた。

「右……右はどうしたの」

「宮嶋さん。手術前に、もう一度よく右を触診したら、腫瘍

が見つかりましてね」

教授の感情を含まない声に、小夜子の顔から血の気が引いていった。

「術前の検査ではわからなかった小さな癌です。きれいに取

れていますから、ご安心ください」



右まで癌……

教授が右もおかしいと術中に診断されて

さすが教授ね早く見つかってよかったわね

教授はそれだけを言うと、隣の術後患者に向かった。主治医の津島研一外科医が穏やかな笑いを唇に乗せて小夜子に近づき、小声で言った。

「あとで詳しく説明します。さすが高垣教授です。検査でも捉えられなかった小さな癌を見つけたのですから」

「み、右まで癌だったのですか」

小夜子の声が乱れた。

「術中迅速凍結切片標本で診断がついたのです」

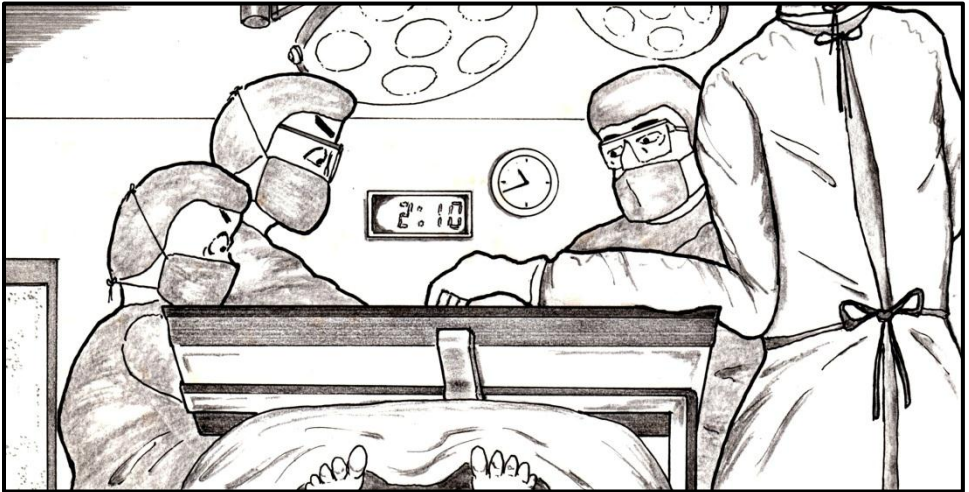
じゅっちゅううじんそくとうけつせつぺん……何、それ？ 小夜子が意味不明の言葉を頭のなかで繰り返しているうちに、津島はつづけた。

「ちょうど乳輪の真下だったので、左とは違って温存手術はできませんでしたが、とにかくきれいに手術できています。大丈夫ですよ」

小夜子はまた平べったい胸を見た。

「あ、あの、このことは主人は」

「昨日の手術中にお話しして、右も根治術をおこなうことに、ご承諾いただ



いていますから」

回復室から教授を先頭に、ソロソロと白衣の集団が出ていく。

「消毒はあとでまた来ます」

ガーゼを創部に置いて、津島は急いで回診の列を追った。

根治術摘出組織に関する病理診断の報告書があがってきたのは二週間後であった。宮嶋小夜子の両側乳癌の手術創は問題なく回復し、消毒の必要もなくなっている。津島医師が診断書を手に告げた。

「左は術前の診断どおり、ステージはⅠですね。リンパ節にも行っていました。ほぼ大丈夫。組織型は高分化型腺癌」

津島は診断書から一度目を離して、患者を見た。声が少しのあいだ途絶えた。

「右はやはりステージはⅠですね。リンパ節転移なし。組織型はこちらも左と同じ高分化型腺癌です」

「先生。それって、左から右に転移したものでしょ」

「いや、その可能性はないでしょう。左のほ

うが少し進んでいますが、リンパ節も転移は一個だけ。右は
ありません。右と左別々の発生だと思えますよ。他の臓器に
は転移はまったくありませんし」

小夜子はほっとした。両方の乳房に癌ができ、二つとも乳
房を失うことになろうとは考えもしなかった不幸だが、検査
にもかかわらずいほどの、きわめて早い時期に教授が右乳癌を
見つけてくれたこと、さすが教授と深い尊敬の念を膨らませ、
感謝の気持ちでいっぱいだった。

退院後の経過は順調だった。再発予防のためにホルモン製
剤の服用をつづけていたが、定期診察の間隔も三カ月に一度
となり、このごろでは自分が乳癌患者であることも忘れるほ
どだった。

そこに届いた一通の匿名の手紙。右は乳癌ではない……恐
ろしい内容……良性腫瘍の線維腺腫を癌と誤診した……別の
人の組織と間違えた？ 私は必要もないのに、右乳房を取ら
れたのか……。

「誰がこんな手紙を送ってきたのよ。
どう信じろというの」

小夜子は
部屋で一人、
大声で叫ん
でいた。



その夜、帰宅して、いの一冊に手紙のことを聞かされた宮嶋
小夜子の夫健太は、頭を抱えていた。

「前にも話しただろ。小夜
子が手術室に入ってから一
時間ぐらい経って、若い医
者が出てきて、右にも癌が
見つかったから、一気にや
ってしまっ、承諾してくれ
と言ってきたんだ。承諾書
もその場で書かされたよ」

「津島先生じゃなかったのね」



「ああ、主治医の津島先生は手術に入っていて出てこれないか
ら、代わりにと言っていた。入院

中見舞いに行つたとき、病棟で何
度か見かけたよ」
それにしても、と健太は顔をあ
げた。

「小夜子の右が乳癌でないなら、
この手紙にもある誰かが、小夜子
と間違われて死んだことになる」

「手紙の差出人、乳腺外科の人か
しら。津島先生じゃ。本当のこと
だとすると、とんでもない話ね」

「小夜子の右のお乳はそのまま、切られることもなく、間違えられた患者さんも、適切な治療を受けることができたはずだ」

二人はおびえた視線を交わして、しばらく見つめ合ったまま、言葉がなかった。

「どうするか……」

やがてポツリと健太がつぶやいた。ゆっくりと右の胸に視線が移った。衣服の上に、以前は誇らしげにそびえていた盛り上がりはない。外出するときには乳房パットを入れるとしても、家では取り外している。

「私、いずれは乳房を再建しようと思っている。高垣教授も再発の危険性はほとんどないっておっしゃっていた。だからなるべく早いうちに決めようと思ってる。○大学には再建専門の先生もいらっしやることだし」

「それにしても、小夜子の右が癌でなかったとしたら、大変なことだぞ。とんでもない誤診だ。しかも死んだ女性がいるなんて……誰だかわかるはずもないか」

「手術で切った組織を取り違えたんでしよう。そんなことって」

「あるんじゃないか、けっこう。左右反対側を手術したっていう話、よく聞かじゃないか」

「恐ろしいこと……でも、もしこのことが本当だったら」

どうしたらいいの、どうしたらいいのか……二人はいつま

でも寝つけなかった。

夜が明けた。

横でござそと動いた夫の目と、寝不足で腫れぼったい小夜子の目が合った。

「夜中、何度もうなされていたようだったぞ」

夫の目も何となく充血気味だ。

「ねえ、あなた。考えたんだけど」

時計をチラッと見て、ベッドから出るまでにはまだ少し時間があると思つた健太は、何だ、と目だけを動かした。

「知り合いの姪御さんが、たしか○大学にいらっしやると聞いた覚えがあるのよ」

「○大学に？ 医者か」

